

<資料>

2011年における流通科学大生の喫煙行動

Smoking Behavior of UMDS Students in 2011

中島 孝子*

Takako Nakashima

喫煙は多くの場合若年時に開始される習慣である。本論では、大学生の喫煙行動の実態調査を目的として、流通科学大生を対象にアンケート調査をおこなった。喫煙経験率は全体で46.8%であり、大学生を対象とした複数の調査結果より高い。回答者の家族に喫煙者がいる場合、「父」がたばこを吸う割合が高い。家族に喫煙者がいないことと、喫煙経験の有無とは関連している。最初の一本を吸った時期として、「高校以降」の割合が高い。さらに、喫煙者において禁煙希望者が多いことも考慮すると、大学入学後の喫煙防止教育や禁煙支援などが必要と考えられる。

キーワード：大学生、喫煙行動、喫煙経験率、最初の1本を吸った時期

I. はじめに

喫煙により喫煙者および周囲の者の健康が損なわれることは多くの研究によって明らかにされてきた。たばこに含まれるニコチンの依存性によって喫煙者が望んでも禁煙は難しいとされている。喫煙という「習慣」の多くは若年時に開始される。箕輪¹⁾らによれば、喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題である。

本論は流通科学大生を対象に実施されたアンケート調査の結果である。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の1本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動を調べることである。

以下に調査および分析結果を要約する。アンケートの回答者の平均年齢は20.1歳、回答者の家族に喫煙者がいる場合、「父」がたばこを吸う割合が50%で最も高かった。一方、家族は「誰も吸わない」と回答した者は35.5%である。喫煙経験者は全体で46.8%であり、これらの喫煙経験者が「最初の一本を吸った時期」は高校以降が最も多かった。これまでに吸った本数の合計が100本を超えているという意味で、喫煙経験者の約6割が、現在または過去において習慣的に喫煙している、またはしていた。喫煙経験者の現在の喫煙量は、「1日11~20本」が最も多く、次に「1

*流通科学大学総合政策学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

日1～10本」および「吸ったことがある程度で習慣ではない」の喫煙量の者が多い。非喫煙者（喫煙未経験者および喫煙経験はあるが「吸ったことがある程度で習慣ではない」者）がたばこを吸わない理由として、「健康のため」「たばこの値段が高い、お金もつたいない」の順に割合が高かった。喫煙者（非喫煙者以外）は約6割が5年後も喫煙していると予想している一方、非喫煙者については、全員が将来も喫煙していないと予想していた。喫煙と健康に関する知識についてテスト形式の質問（6点満点）をしたところ、回答者全体の平均は3.5点であった。非喫煙者に比較して、喫煙者のほうが平均点は低かった（喫煙者3.1点、非喫煙者3.7点）。

いくつかの項目を取り出して分析および考察をおこなった結果は以下のとおりである：(1) 本調査における喫煙経験率は、2009年、2010年における流通科学大学生を対象とした調査結果^{2) 3)}（以下、2009年調査、2010年調査とする）、および大学生を対象とした複数の調査結果より高い。(2) たばこを吸う家族がいないことと、喫煙経験の有無とは統計的に有意に関連している。(3) 最初の一本を吸った時期として最も多いのは「高校以降」である。次に「小学生」、「中学2年」、「高校3年」が同程度に多い。(4) 喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の1本を吸った時期には統計的に有意な関連はみられなかった。また、日常的な喫煙者は、「中学校」（25.0%）および「高校」（50.0%）で最初の一本を吸っている。一方、日常的でない喫煙者は「中学校」（41.2%）および「高校以降」（29.4%）に最初の一本を吸っている者が多い。(5) 喫煙と健康に関する知識に関連して、喫煙者と非喫煙者を比較すると、得点およびマークした病気の数の分布はそれぞれ異なる。(6) 喫煙者において、禁煙希望ありは禁煙希望なしの2倍以上であった。(7) 現在の喫煙量が多い者ほど、これまでの喫煙本数の合計が100本を超えている者が多い。(8) 2010年秋のたばこ税増税に伴うたばこ価格値上げの事実について、ほとんどの回答者が知っていると答えた（98.4%）。(9) 仮想的なたばこ価格における喫煙量を尋ねたところ、回答者全体および喫煙者ともに、価格が上がるにつれて「毎日吸う」者の割合が減少し「吸わない」と回答する者の割合が増加する。ただし、喫煙者について現在の喫煙量と1箱200円の場合の喫煙量を比較すると、両者の違いは単純ではない。

以下では、Ⅱ節でアンケート結果の概略を述べ、Ⅲ節で結果の分析および考察を行い、Ⅳ節でまとめを述べる。

Ⅱ. アンケート結果

アンケートは、大学1、2年生を主な対象とする講義の受講者に対して、講義の初日（2011年4月）に匿名でおこなった。ただし、2011年度の履修登録者は2009年調査および2010年調査と異なり2年生以上が中心であった。質問は全部で16問あり、一部、喫煙経験ありの者と喫煙経験なしの者とで質問が異なる。アンケートの回答用紙を返却した人数は99人、うち62人分を有効回答としてデータの集計対象とした⁴⁾。

有効データ数 62 の内訳は、男性 51 人 (82.3%)、女性 11 人 (17.7%) である。回答者の平均年齢は 20.1 歳で、2010 年調査 (19.1 歳) よりもおよそ 1 歳高い。回答者の年齢の内訳をみると、20 歳 (43.5%)、21 歳 (27.4%)、19 歳 (25.8%) の順に多い。

家族の喫煙状況について複数回答で質問した結果を表 1 にまとめた。家族の中では「父」が吸うと答えた者が最も多い。「父」が吸っている者の割合は、2010 年調査では 4 割弱だったものが 5 割に増加している。以下「兄」、「母」、「祖父」の順となる。家族は「誰も吸わない」と回答した者は全体の 35.5% で、2010 年調査の 41.7% よりも減少した。

喫煙経験者は全体の 46.8% である。男女の内訳は表 2 のとおりである。喫煙経験者とは、アンケート調査日までに 1 回でもたばこを吸ったことがある者である。回答者全体、男性および女性のいずれについても喫煙経験率は 2010 年調査よりも増加した。

喫煙経験者 29 名に対して、「最初の 1 本を吸った時期」について質問した。図 1 を見ると、2010 年調査と同様、小学校や中学校など比較的 low 年齢の時期に最初の 1 本を吸っている者が存在する。ただし、その割合は 2010 年調査と比較して「中学 2 年」および「高校 1 年」で減少し、「高校 3 年」および「高校以降」で増加している。特に「高校以降」の割合は本調査における「最初に吸った時期」で最も高い。調査対象者が 2 年生以上であることを考慮すると、浪人経験者などを除き、大学入学後に最初の 1 本を吸った者が多いことを意味する。

喫煙経験者に対して、これまで吸った本数をあわせると 100 本を超えるかどうかをたずねた。この質問は喫煙が習慣となっているかどうかの目安の一つとなる。これまで吸った本数が 100 本を超えている場合、現在または過去に喫煙が習慣となっている (いた) 者といえる。表 3 をみると喫煙経験者の 6 割強が「100 本を超える」と答えた。この割合は 2010 年調査と比べると、わずかに下落している。

表 1. たばこを吸う家族 (複数回答)

	人数 (2011)	割合 (2011, %)	割合 (2010, %)
父	31	50.0	37.3
兄	10	16.1	11.8
母	4	6.5	13.2
祖父	4	6.5	9.3
祖母	3	4.8	3.4
姉	1	1.6	2.9
弟	1	1.6	2.5
妹	0	0.0	0.5
その他	3	4.8	2.9
誰も吸わない	22	35.5	41.7

表 2. 喫煙経験者の人数と割合

	人数 (2011)	割合 (2011, %)	割合 (2010, %)
全体	29	46.8	29.4
男性	25	49.0	33.8
女性	4	36.4	13.6

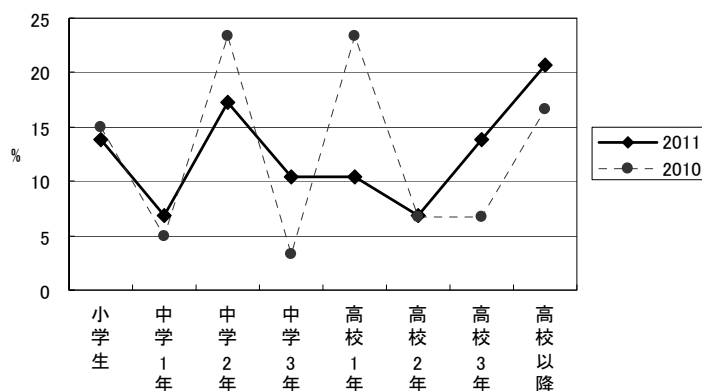


図 1. 最初の1本を吸った時期

同時に喫煙経験者に対して現在の喫煙量を尋ねた（表 4）。最も多いのは、喫煙量が「1日11本～20本」である。次に「1日1～10本」および「吸ったことがある程度で習慣ではない」という回答が多かった。毎日吸っている者は平均的に2日に1箱程度消費しており、さらに毎日吸っている者の喫煙経験者に占める割合は6割に近い。喫煙量に関する傾向は2010年調査と比較してほとんど変化はみられないが、毎日喫煙している者（カテゴリー1～3）の割合がわずかに減少している。また、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」（カテゴリー6）の割合が増加し、「吸ったことがある程度で習慣ではない」（カテゴリー7）の割合が2010年調査よりも減少している。

表 3. これまで吸った本数の合計（喫煙経験者）

	人数 (2011)	割合 (2011, %)	割合 (2010, %)
100本を超える	18	62.1	68.3
100本を超えない	11	37.9	31.7
合計	29	100.0	100.0

表 4. 現在の喫煙量（喫煙経験者）

喫煙量	人数（2011）	割合（2011, %）	割合（2010, %）
1 1日21本以上	0	0.0	6.7
2 1日11本～20本	9	31.0	31.7
3 1日1～10本	8	27.6	30.0
4 週に数本程度	2	6.9	0.0
5 月に数本程度	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	4	13.8	1.7
7 吸ったことがある程度で習慣ではない	6	20.7	30.0
合計	29	100.0	100.0

表 5. 喫煙をしない理由（複数回答）

喫煙をしない理由（複数回答）	人数（2011）	割合（2011, %）	割合（2010, %）
健康のため	32	82.1	71.0
たばこの値段が高い、お金がもったいない	30	76.9	42.6
たばこが嫌い	23	59.0	55.6
人の迷惑を考えて	16	41.0	19.1
機会がなかったから	12	30.8	8.6
その他	5	12.8	9.9

ここで、回答者を喫煙経験および喫煙量に応じて2タイプに分ける。1つ目は、喫煙量のカテゴリー1～6に含まれる者である。これを「喫煙者」と定義する。2つ目は、喫煙量のカテゴリー7に含まれる者および喫煙未経験者である。これを「非喫煙者」と定義する。

非喫煙者（合計39人）に対して、たばこを吸わない理由を複数回答で尋ねた。結果は表5のとおりである。最も多いのが「健康のため」、次に多いのが「たばこの値段が高い、もったいない」という回答であった。2010年調査で2番目に多い回答は「たばこが嫌い」であった。「たばこを吸わない理由」におけるこの変化には、2010年10月におけるたばこ税増税の影響の可能性が考えられる。

表 6. 5年後の予想

	喫煙者			非喫煙者		
	人数 (2011)	割合 (2011, %)	割合 (2010, %)	人数 (2011)	割合 (2011, %)	割合 (2010, %)
5年後にたばこを吸っている	14	60.9	50	0	0	6.2
5年後にたばこを吸っていない	9	39.1	50	39	100	93.8
合計	23	100	100	39	100	100

表 7. 喫煙と健康に関する知識の得点分布

得点	人数 (2011)	割合 (2011, %)	割合 (2010, %)
1	0	0.0	1.0
2	16	25.8	19.6
3	18	29.0	23.5
4	15	24.2	25.5
5	10	16.1	24.0
6	3	4.8	6.4
合計	62	100	100

表 8. たばこ価格が変化した場合の喫煙量 (全員)

喫煙量	人数				割合 (%)			
	たばこ 1 箱 (20 本) の価格				たばこ 1 箱 (20 本) の価格			
	200 円	600 円	800 円	1000 円	200 円	600 円	800 円	1000 円
1 1 日 21 本以上	2	0	0	0	3.2	0.0	0.0	0.0
2 1 日 11 本~20 本	8	3	3	3	12.9	4.8	4.8	4.8
3 1 日 1~10 本	7	7	2	2	11.3	11.3	3.2	3.2
4 週に数本程度	1	2	1	1	1.6	3.2	1.6	1.6
5 月に数本程度	1	0	0	0	1.6	0.0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	5	5	8	6	8.1	8.1	12.9	9.7
7 吸わない	38	45	48	50	61.3	72.6	77.4	80.6
合計	62	62	62	62	100	100	100	100

回答者全員に対して 2 つの質問をした。1 つは、「5 年後にたばこを吸っているかどうか」、2 つめは喫煙と健康に関する知識についての質問である。

表 6 より、喫煙者は、約 6 割が 5 年後もたばこを吸っていると予想しているのに対し、非喫煙者は、全員が 5 年後もたばこを吸っていないと予想している。2010 年調査と比較すると、喫煙者は 5 割が 5 年後も吸っていると予想していたのに対し、本調査では約 6 割に増加している。

喫煙と健康に関する知識として、脳卒中、肺がん、食道がん、胃がん、心筋梗塞、膀胱がんの 6 種類の疾病を挙げ、その中で喫煙者の死亡確率が非喫煙者の 10 倍以上であるものを選ばせた。6 つの疾病のうち死亡確率に 10 倍の差があるのは肺がんと食道がんである⁵⁾。正しい選択肢を選べば 1 点を与え、同時に正しくない選択肢を選ばなかった場合も 1 点を与えて、最高得点を 6 点とした。全体で平均は 3.5 点である。得点分布は 3 点をピークとする分布となっている (表 7)。2010 年調査と比較すると、ピークが高くかつ得点の低い方に偏った分布となっている。

2010 年 10 月、たばこ消費税が増税された⁶⁾。増税に伴い、たばこ価格は値上げされ、銘柄に

もよるがたばこ 1 箱あたり (20 本入り) で 300 円前後だったものが、およそ 400 円前後となった^{7) 8) 9)}。この事実について知っているかどうかきいたところ、62 人の有効回答者のうち、「知っている」が 61 人、「知らない」が 1 人であり、ほとんどがたばこ価格の値上げについて知っていた。

最後に、仮想的な質問として、たばこ 1 箱 (20 本入り) の価格が 200 円、600 円、800 円、1000 円になった場合における喫煙量を回答者全員に尋ねた (表 8)。たばこ価格が低い場合 (1 箱 200 円) に比較して、600 円、800 円、1000 円と価格が上がっていくにつれて、「吸わない」(カテゴリー7) と答える者が増加する。また、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」(カテゴリー6) という回答は、600 円の場合に比較して 800 円でいったん増加するが、1000 円になると再び減少する。さらに「毎日吸う」(カテゴリー1~3) という回答は価格の上昇にしたがい減少し、「1 日 20 本以上」(カテゴリー1) については 600 円からゼロとなるが、「1 日 11 本~20 本」および「1 日 1~10 本」(カテゴリー2、3) については減少するものの数値は固定化する。すなわち、たばこ価格が仮に 1 箱 (20 本) あたり 1000 円まで上昇しても喫煙者はゼロにはならないことを意味していると考えられる。

Ⅲ. 分析および考察

1. 喫煙経験と家族の喫煙状況

家族の喫煙状況を喫煙経験の有無別にみると、家族のうち「誰も吸わない」と答えた者の割合は喫煙未経験者のほうが高い。家族の喫煙状況について、喫煙経験の有無と関連があると考えられるのは、「誰も吸わない」という項目である。そこで、家族の喫煙状況について「誰かが吸う」か「誰も吸わない」かに注目し、表 1 と表 2 から表 9 (クロス集計表) を作成した。

家族が「誰も吸わない」ほど喫煙経験がないと予想される。帰無仮説を「喫煙経験と家族に喫煙者の有無とは関連がない」として、独立性の検定をおこなった。その結果、帰無仮説は棄却され、喫煙経験の有無と家族に喫煙者がいるかどうかは関連しているといえる (有意水準 0.05)。

表 9. 喫煙経験別のたばこを吸う家族

	喫煙経験あり (人)	喫煙経験なし (人)	喫煙経験あり (%)	喫煙経験なし (%)
家族の誰かが吸う	23	17	79.3	51.5
家族は誰も吸わない	6	16	20.7	48.5
合計	29	33	100	100

2. 喫煙経験者における最初の 1 本を吸った時期と現在の喫煙量

ここでは、喫煙経験を喫煙量に応じて 2 タイプに分ける。1 つ目は、喫煙量のカテゴリー 1~3 に含まれ、毎日喫煙している喫煙経験者である。これを「日常的な喫煙者」と定義する。2 つ目

は、喫煙量のカテゴリ4~7に含まれ、たまに喫煙をする、または現在は喫煙をしない喫煙経験者である。これを「日常的でない喫煙者」と定義する。さらに、最初の1本を吸った時期を「小学校」「中学校」「高校」「高校以降」の4つに集約する。

日常的な喫煙者および日常的でない喫煙者それぞれについて、最初の1本を吸った時期を集計すると表10のようになる。2つのタイプの喫煙経験を比較すると、日常的な喫煙者は「高校」で初めて吸ったことがある者が多く、日常的でない喫煙者は「中学校」と「高校以降」に初めて吸ったことがある者が多い。一方、「小学校」で初めて吸った者の割合は日常的な喫煙者が高いが両者の間にはあまり差がない。すなわち、本調査では、「小学校」をのぞいて、日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者との間に相補的な分布が観察される。一方、2010年調査と比較すると、日常的な喫煙者では「小学校」および「高校」で初めて吸った者が増加し、「中学校」と「高校以降」で初めて吸った者が減少した。日常的でない喫煙者では逆の動きを示し、「小学校」と「高校」で減少、「中学校」と「高校以降」で増加した。

現在の喫煙量と最初の1本を吸った時期の関係について、独立性の検定を行ったところ「現在の喫煙量と最初の1本を吸った時期に関連がない」という結論を得た（有意水準0.05）。この結論は2010年調査における「現在の喫煙量と最初の1本を吸った時期に関連がある」という結論とは逆である。

表 10. 最初の1本を吸った時期

最初の1本を吸った時期	2011				2010	
	日常的な喫煙者(人)	日常的でない喫煙者(人)	日常的な喫煙者(%)	日常的でない喫煙者(%)	日常的な喫煙者(%)	日常的でない喫煙者(%)
小学校	2	2	16.7	11.8	9.8	26.3
中学校	3	7	25.0	41.2	31.7	31.6
高校	6	3	50.0	17.6	36.6	36.8
高校以降	1	5	8.3	29.4	22.0	5.3
合計	12	17	100	100	100	100

3. 知識

喫煙者と非喫煙者について、喫煙と健康の知識に関する質問での得点分布を図示すると図2のようになる。喫煙者の得点分布は2点と3点をピークとする得点の低い方に偏った分布であるのに対し、非喫煙者の得点分布は4点をピークとする分布を示している。また両者の得点の平均点はそれぞれ3.1点と3.7点であり、非喫煙者のほうが高い。なお、得点分布は、喫煙者については2010年調査と同様に単峰型であるが、2011年のほうがピークにおける高さは高くなっている。非喫煙者についてはピークが5点から4点に変化している。

一方、マークした病気の数を比較したところ、図3のような分布となった。マークした病気の数が多いほど、その回答者は喫煙するほど多くの病気になりやすいと考えていると推測できる。本調査における喫煙者は、3個と6個にマークした者の割合が最も高く、平均は3.8個である。一方、非喫煙者は、マークした数が3個をピークとする分布となっており、平均は3.6個である。図3において本調査と2010年調査の分布を比較すると、喫煙者がマークした病気の個数の分布は、2010年調査の3峰型からより鋭い2峰型に変化していることが観察される。非喫煙者の場合には2010年調査と比較してマーク数が少ない者（1個および2個）の割合が減少し、マーク数の多い者（4～6個）の割合が増加している。

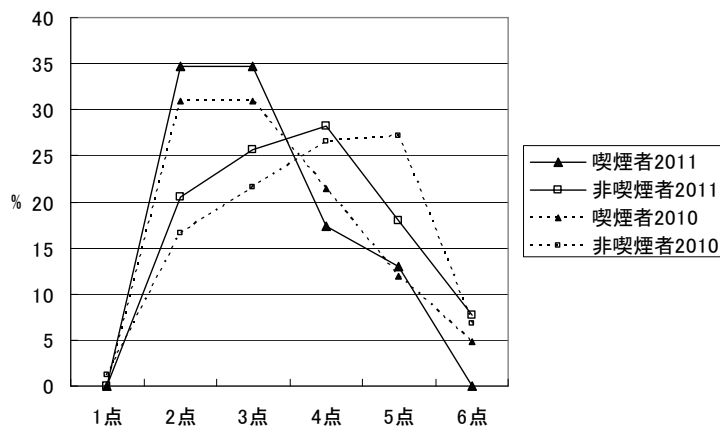


図2. 知識に関する得点分布（2011 および 2010）

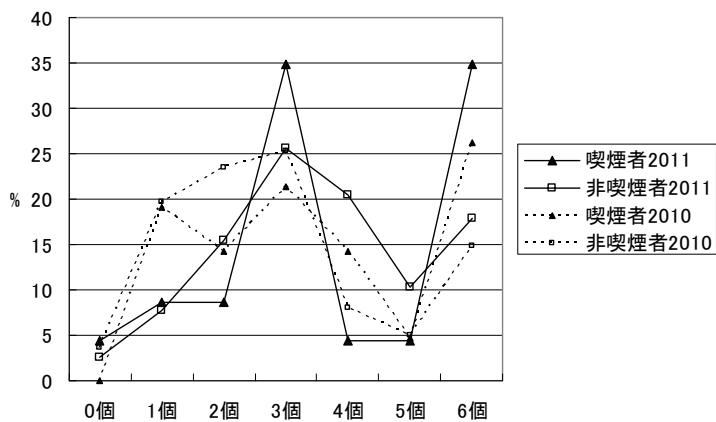


図3. マークした病気の数（2011 および 2010）

表 11. 喫煙経験者の喫煙量と禁煙希望

喫煙量	禁煙希望あり			禁煙希望なし		
	人数 (2011,人)	割合 (2011,%)	割合 (2010,%)	人数 (2011,人)	割合 (2011,%)	割合 (2010,%)
1 1日21本以上	0	0.0	10.0	0	0.0	8.3
2 1日11～20本	6	37.5	46.7	3	42.9	41.7
3 1日1～10本	6	37.5	40.0	2	28.6	50.0
4 週に数本程度	1	6.3	0.0	1	14.3	0.0
5 月に数本程度	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	3	18.8	3.3	1	14.3	0.0
合計	16	100	100	7	100	100

表 12. これまでの喫煙量が100本を超える者と超えない者の現在の喫煙量

喫煙量	これまでの喫煙量が 100本を超える			これまでの喫煙量が 100本を超えない		
	人数 (2011)	割合 (2011,%)	割合 (2010,%)	人数 (2011)	割合 (2011,%)	割合 (2010,%)
1 1日21本以上	0	0.0	9.8	0	0.0	0.0
2 1日11本～20本	9	50.0	46.3	0	0.0	0.0
3 1日1～10本	8	44.4	41.5	0	0.0	5.3
4 週に数本程度	0	0.0	0.0	2	18.2	0.0
5 月に数本程度	0	0.0	0.0	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	1	5.6	0.0	3	27.3	5.3
7 吸ったことがある程度で 習慣ではない	0	0.0	2.4	6	54.3	89.5
合計	18	100	100	11	100	100

4. 喫煙者の喫煙量と禁煙希望の有無

喫煙者に対して、禁煙の希望を尋ねたところ、23人中16人が禁煙を希望し、7人は希望しないと答えた(表11)。全体としては禁煙を希望する者が希望しない者の2倍以上となっている。2010年調査に比較して、日常的な喫煙者の禁煙希望ありの割合が減少し、日常的でない喫煙者の禁煙希望ありの割合が増加している。

5. 喫煙経験者：これまでの喫煙量が100本を超える者と超えない者の喫煙量

これまでの喫煙量が100本を超えているかどうかは、過去または現在における喫煙習慣の有無を判断する指標となる。表12を見ると、これまでの喫煙量が100本を超える者については、1日11～20本吸っている者(喫煙量のカテゴリ-2)および1日1～10本吸っている者(カテゴリ-3)

が多く、合計で9割を越える。これらの者は現在においても喫煙が習慣となっていると考えられる。しかし、これまでの喫煙量が100本を超えていながら「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」と答えた者(カテゴリー6)については、かつては喫煙が習慣となっていたが、現在は喫煙をたまにしかしないと解釈できる。本調査と2010年調査とを比較すると、これまでの喫煙量が100本を超える者については、おおよそ分布の傾向が似ている。しかし、これまでの喫煙量が100本を超えない者については変化が観察される。本調査では「毎日喫煙する者」(カテゴリー1~3)がゼロとなり、「吸わない」(カテゴリー7)が減少する一方、「週に数本程度」(カテゴリー4)の者が出現し、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」(カテゴリー6)の者が増加している。この変化については、最初の1本を吸った時期が本調査において「高校以降」で多いことと関連すると考えられる。

表 13. たばこ価格が変化した場合の喫煙量(喫煙経験者)

喫煙量	人数				割合(%)				現在の喫煙量(再掲)
	たばこ1箱(20本)の価格				たばこ1箱(20本)の価格				
	200円	600円	800円	1000円	200円	600円	800円	1000円	
1 1日21本以上	2	0	0	0	6.9	0.0	0.0	0.0	0.0
2 1日11本~20本	8	3	3	3	27.6	10.3	10.3	10.3	31.0
3 1日1~10本	6	7	2	2	20.7	24.1	6.9	6.9	27.6
4 週に数本程度	1	2	1	1	3.4	6.9	3.4	3.4	6.9
5 月に数本程度	1	0	0	0	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、 気が向いたときだけ	5	5	8	6	17.2	17.2	27.6	20.7	13.8
7 吸わない	6	12	15	17	20.7	41.4	51.7	58.6	20.7
合計	29	29	29	29	100	100	100	100	100

表 14. 喫煙経験率の比較

調査の種類	調査の時期	データの属性	男性	女性
本調査	2011年4月	大学生(平均年齢20.1歳)	49.0%	36.4%
中島(2011)	2010年4月	大学生(平均年齢19.1歳)	33.8%	13.6%
中島(2010)	2009年4月	大学生(平均年齢19.3歳)	35.2%	17.9%
中尾他(2007)	2002年4~7月	大学生(平均年齢19.2歳)	31.9%	6.3%
新井他(2009)	2007年11~12月	大学生(1~4年生)	17.2%	1.9%
石川・高橋(2011)	2010年6~9月	大学生1年生	26%	11%
石川・高橋(2011)	2010年6~9月	大学生2年生	37%	13%
石川・高橋(2011)	2010年6~9月	大学生3年生	39%	14%

6. 仮想的なたばこ価格の変化と喫煙経験者の喫煙量

たばこ価格が変化したとする場合の喫煙量を喫煙経験者について集計した(表 13)。回答者全体の場合と同様に、喫煙経験者についてもたばこ価格の上昇に従って「吸わない」(カテゴリー7)という回答が増加し、「毎日吸う」(カテゴリー1~3)の回答が減少し数値が固定化する。なお、現在の喫煙量と比較したとき、価格が上昇した場合は喫煙量の多いカテゴリー(カテゴリー1~3など)が減少し、「吸わない」(カテゴリー7)の回答が増加する。しかし、価格が200円に下落した場合についてはそれほど単純ではない。現在の喫煙量と比較して、価格200円では「1日21本以上」喫煙する者(カテゴリー1)が生じるが、逆に「1日1~10本」と「1日10~20本」(カテゴリー2および3)の割合はいずれも減少する。結果として「毎日吸う」(カテゴリー1~3)者の割合の合計は、価格200円においてむしろ減少する。一方、価格の下落によって「月に数本程度」喫煙する者(カテゴリー5)が出現し、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」喫煙する者(カテゴリー6)が増加するが、「吸わない」(カテゴリー7)者の割合には変化がなかった。

7. 喫煙経験率の比較

本調査における喫煙経験率を男女別にみると男性49.0%、女性36.4%である。本調査における喫煙経験率は2009年調査および2010年調査における喫煙経験率と比較すると、男女ともに高い(表 14)。

本調査における喫煙経験率を大学生を対象とする他の調査と比較する。中尾他¹⁰⁾による大学生を対象とする最近の調査では、喫煙経験率は男性31.9%、女性6.3%である。また、新井他¹¹⁾の調査では、喫煙経験率はさらに低く、男性17.2%、女性1.9%である。一方、石川・高橋¹²⁾の大学生を対象とする調査では、学年が上がるごとに喫煙経験率が上昇している。しかし、大学3年生男性でも39%であり、本調査の結果よりも10%程度低い。

以上より、本調査における喫煙経験率は、中尾他¹⁰⁾、新井他¹¹⁾や石川・高橋¹²⁾が大学生を対象として行った喫煙経験率よりも男女ともかなり高い。ただし、女性については、本調査のデータ数が11と少ないことを考慮する必要があるだろう。

IV. おわりに

本論では流通科学大生を対象に実施したアンケート調査の結果を述べている。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の1本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動を調べることである。

結果は、以下のとおりである：(1) 喫煙経験率は全体で46.8%であった。この割合は、流通科学大生を対象とする2009年調査、2010年調査、および他大学の学生を対象とした複数の調査結果より高い。(2) 回答者の家族に喫煙者がいる場合、「父」がたばこを吸う割合(50%)が最も高

い。2010年調査と異なり、「父」がたばこを吸う割合（50%）は、家族が「誰も吸わない」割合（35.5%）より高い。また、たばこを吸う家族がいないことと、喫煙経験の有無とは統計的に有意に関連している（有意水準 0.05）。(3) 最初の一本を吸った時期として最も多いのは「高校以降」である。次に「小学生」、「中学2年」、「高校3年」が同程度に多い。(4) 喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の1本を吸った時期には統計的に有意な関連はみられなかった（有意水準 0.05）。また、日常的な喫煙者は、「中学校」（25.0%）および「高校」（50.0%）で最初の一本を吸っている一方で、日常的でない喫煙者は「中学校」（41.2%）および「高校以降」（29.4%）に最初の一本を吸っている者が多い。(5) 喫煙と健康に関する知識に関連して、喫煙者と非喫煙者を比較すると、得点およびマークした病気の数の分布は異なる。喫煙者の得点分布は2、3点をピークとする左に偏った分布であるのに対し、非喫煙者は4点をピークとする得点分布を見せている。一方、喫煙者はマークした病気の数が3個と6個をピークとする分布となっているが、非喫煙者は3個をピークとする分布を示した。(6) 喫煙者において、禁煙希望ありは禁煙希望なしの2倍以上であった。(7) 現在の喫煙量が多い者ほど、これまでの喫煙本数の合計が100本を超えている者が多い。この傾向は2010年調査と同様である。しかし、喫煙本数の合計が100本を超えない者については、2010年調査と比較して「吸ったことがある程度で習慣ではない」者の割合が減少し、「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」の者の割合が増加した。(8) 2010年秋のたばこ税増税に伴うたばこ価格値上げの事実について、ほとんどの回答者が知っていると答えた（98.4%）。(9) 回答者全員に、仮想的なたばこ価格における喫煙量を尋ねたところ、価格が上がるにつれて「毎日吸う」者の割合が減少し、「吸わない」者の割合が減少する。ただし、喫煙者については、現在の喫煙量と価格が低い場合（1箱200円）の喫煙量を比較すると、両者の違いは単純ではない。

喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題である。実際、本調査では、2010年調査に比較して喫煙経験率が大きく上昇した。両者の大きな違いは平均年齢にある。2010年調査では入学間もない1年生が調査対象の中心であったのに対し、本調査では2年生以上が対象となっている。また、最初の1本を吸った時期についても「高校以降」が増加している。本調査の結果は、多くの文献¹³⁾において指摘されているように、大学入学以降の喫煙開始の抑止が大きな問題であることを示唆している。さらに、禁煙希望ありの喫煙者が禁煙希望なしを大きく上まわることを考慮すると、禁煙希望者への情報提供などの禁煙支援を大学という教育機関において実施する必要がある。

大学における喫煙対策として、敷地内禁煙、建物内の禁煙、たばこ自動販売機を設置しない、喫煙防止教育や禁煙教育、禁煙サポートが挙げられる（中井他¹⁴⁾、中井他¹⁵⁾）。たとえば中井他¹⁴⁾が調査した86国立大学のうち38の大学では学内でたばこの販売を行っていない。また、国立大学法人での喫煙対策は建物内禁煙が主であり、敷地内禁煙は5大学にとどまっていた。また、中井他¹⁵⁾は複数の大学（国公立を合わせ59大学）を対象とする喫煙大学生への禁煙支援介入

(スタッフによる面談、必要に応じたニコチンパッチの無償配布、およびメールによる禁煙サポート(カレッジ禁煙マラソン)など)の実施を報告しているが、禁煙プログラムに参加した大学生を継続して追跡することの困難さを指摘している。

このほか、仮想的な価格と喫煙量の関係を見ると、たばこ価格の値上げも限界はあるものの、若年者の喫煙行動を変化させるのに効果があると考えられる。すなわち、たばこ価格のさらなる値上げ(増税)の実施が検討されるべきである。

今後の課題は口頭および質問用紙における回答指示の工夫である。返却された99の回答用紙のうち、37人分が無効回答となった。回答において空欄が生じないよう、あてはまらないばあいは「0」をマークするように質問用紙の内容を変更した。また、回答の際、口頭で回答方法について説明をしたが、2010年調査と有効回答率はあまり変化がなかった。効果的な回答指示をさらに工夫する必要がある。

謝辞

アンケートに協力していただいた学生のみなさん、および匿名の確認者のコメントに感謝いたします。もちろん、残る誤りは著者のものです。

引用文献、注

- 1) 箕輪眞澄・尾崎米厚:「若年における喫煙開始がもたらす悪影響」,『保健医療科学』54, No. 4 (2005), pp. 262-277.
- 2) 中島孝子:「2009年における流通科学大生の喫煙行動」,『流通科学大学論集』18, No. 2(2010), pp. 157-168.
- 3) 中島孝子:「2010年における流通科学大生の喫煙行動」,『流通科学大学論集』19, No. 2(2011), pp. 121-133.
- 4) 喫煙経験者であるのに、喫煙経験のない者を対象とする質問に回答があるなどのデータを無効とした。
- 5) 井伊雅子・大日康史:『医療サービス需要の経済分析』(日本経済新聞社, 2002)。
- 6) 財務省「たばこ税等の税率及び税収」(URL: http://www.mof.go.jp/tax_policy/summary/consumption/127.htm, 2010年8月20日取得)。
- 7) All About ニュース「たばこ税増税 1箱あたり100円以上の値上げへ」(2010年9月8日)(URL: <http://focus.allabout.co.jp/gm/gc/290785/?from=dailynews.yahoo.co.jp>, 2010年8月20日取得)。
- 8) 財務省「日本たばこ産業株式会社製紙巻たばこ等の小売定価変更の認可をしました」(URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100716_press.htm, 2010年8月20日取得)。
- 9) 財務省「フィリップ・モリス社及びブリティッシュ・アメリカン・タバコ社製品の小売定価変更の認可をしました」(URL: http://www.mof.go.jp/tab_salt/topics/20100806_press.htm, 2010年8月20日取得)。
- 10) 中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦:「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度 — 大学生の質問紙調査から—」,『保健学研究』20, No. 1 (2007), pp. 59-65.
- 11) 新井信成・上地勝・富樫泰一:「本学学生における喫煙行動および知識・態度に関する調査研究」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』58 (2009), pp. 423-438.
- 12) 石川達也・高橋薫:「大学生の健康観: 喫煙およびムンプスに対する認識: 日本福祉大学2010年アンケート」

- ト調査からの検討」『日本福祉大学社会福祉論集』(124), 27-37, 2011-03-31.
- 13) たとえば中尾他 (2007) .
 - 14) 中井久美子・高橋裕子・清原康介・苗村郁郎・立身政信・寺尾英夫・吉原正治・杉田義郎・森山敏樹・鎌野寛・盛岡洋史・池谷直樹・辻井啓之・山形然太郎:「全国国立大学法人における喫煙対策調査(2006年度調査)」, 『禁煙科学』2, No. 4 (2008) , pp. 9-14.
 - 15) 中井久美子・高橋裕子・清原康介:「大学禁煙化プロジェクトにおける喫煙大学生への禁煙支援介入の成果」, 『禁煙科学』2, No. 4 (2008) , pp. 22-28.